敬造法師寺、田園封戸奴婢等納奉。又敬造丈六二軀、又修自餘種々善根。以此功德、我現在父母六親眷屬等爲、燒流佛法罪、及所奉之物返取滅之罪、悉欲贖除滅、面奉彌勒、聽聞正法、悟無生忍、速成正覺、十方諸佛及四天等處。以至誠心誓願所造二寺、及二軀丈六、更不破、不流、不斫、不燒、二寺所納種々諸物、更不攝取、不滅、不犯不謬也。若我正身、若我後嗣子孫等、若疎他人等、若有此二軀丈六所納之物、返逼取、謬有如此事者、必當受種々大災大差。(下略)

物を犯すものゝ災禍、佛を恭敬するものゝ福德をくだ〳〵しく述べ立てゝ居るのである。是れ蓋し此の寺衰退し、寺領が押領せられ、寺物が犯用さるゝに對する、寺僧等の最後の悲鳴の辭であらねばならぬ。尙此の以外にも、事實の矛盾、用語の不穩當等、指摘すべき甚多くの馬脚を有して居るが、以上述べた所だけでも既に其の僞作の證據充分過ぎる程であるから、狂人走れば不狂人ともに走るの陋を避けて、大抵は省略に附する事とする。

まだ此の外にも、是に類した語を繰り返して、寺

ポリビオスの史風(下)

文學士　原　隨　園

彼の歷史觀、卽ち彼が歷史事件をどう見たかといふ中に於て、最も注目さるゝのは、歷史事件が

十　彼の歷史觀、その一、
超自然力の排除。

進行する所の動因に就いての考察であつた。彼の合理的批判的な研究態度は、歴史事件の解決をば單に偶然だとして葬り去る事を許さなかつた。彼の希望としては、事實の奥に潛む動機、原因にまで立ち到りたかつたのである。固より偶然ではないからといつて、之を神の力、運命の力に歸するといふ事も、彼の敢えてせざる所であつた。スキピオに關する世の批評が、動もすれば、彼の成功の原因を神の力に歸する事を述べて、

「彼スキピオは唯一個の運命の寵兒だとして表現される。彼の多くの企ては、豫期に反し、又は唯だ偶然によつて出來たかの如くに考へられて居る。即ち、一々の事に向つて熟慮の後行動する人達よりは、彼は一層神的であり、驚嘆に價すると考へられる」（註一）

といふて居る。固よりポリビオスはかゝる見解には反對であつた。彼の見る所によれば世間の批評家も、自然的な合理的な解釋を認めては居る。けれども彌々その結果を語るといふ場合には之を捨てゝ了ふ。自然的な解釋、それは概ね人間的な平凡な結果に流れるので之を避け、反つて煥爛の筆を舞はして神とか幸運とかにその功を歸してしまふのが常である。固より歴史家の內心では、かゝる見解を決して信じて居るのでもなく、從つて又信念とは矛盾するのであるが、それにも關らず、實際發表する時には、原因を超自然力に歸して了ふのである。かくの如きは全く不徹底な態度だと彼は言ふのである。（註二）

彼自身の立場としては、飽くまでも運命の力に原因を歸着させる事を斥ける。そして斷乎として原因の解剖を合理的に續けて行かうとする。個々の事件は必ず何等かの原因から起つて來ると信ずるのである。無論、歴史事件には、原因の不明な場合もあろう。偶然だとか、神祕だとか思はるゝ場合もあろう。然しそれは若干の例外たるに過ぎ

ないといふのである。それを人々は唯幸運とか或は偶然とか稱して片つけてしまふのが常だと言つて居る。（註三）彼の心持は、歴史事件の展開をかく簡單に神秘化する事では滿足されないのである。

「自分は實用的歴史記述の樣式、方法に關する限りに於て、此の問題を論じたい。人々は、原因を認識する事が不可能とか、又は困難なる場合には、茫然として是を神とか運命とかに歸したがるのである。例へば、繼續する異常な豪雨とか、霖雨とかの場合、その他久しく打ち續く旱魃や寒氣などのために、穀物熟せずといふような場合、或は永續的な怪異といふような場合の如き、それ等の原因が容易に見出し得ないといふ場合がそれである。かくの如き場合には勿論途方に暮れるあまり、自分等は多數の人達の信仰に從ふ者であつて、犧牲祈禱によつて神意をなだめたりする。又良くなるよう或は災厄を排ふためには、吾々が言ひ且つ爲すべき事を伺つても見る。然し乍ら一つの事件の原因なり動機なりを發見し得るような場合には、私の判斷によれば斷じて之を神の處に持つてゆくべきではない。」（註四）

と言つて居る。

彼はかくの如く、超自然力、運命の力を、歴史事件の原因として取扱ふ事には極力排除する態度をとつたのである。そして飽くまでも歴史事件の發生する動因を探求したのである。是は、彼の科學的立場から、當然そうあるべきだと言はねばならぬ。

又一面から考へれば、彼の實用的立場は、是非とも超自然的原因を除いて、原因の考察を徹底させなければ自家撞着に陷るの他はない。歴史事件が若し偶然の原因から發生するものならば、實用的立場からは歴史を考究する必要がなくなつてしまふ。歴史事件の進行を合理的と解釋する事によつて始めて、歴史の實用的意味が生じて來るので

ある。されば彼の立場からすれば、かく歴史事件を合理的と解釋する事は、彼が必然赴かねばならぬ。結局であつたのである。(註五)

註一、Pol. 10, 2.　註二、ibid 10, 9.
註三、Pol. 32, 16.　註四、ibid. 37, 4.
註五、cf. Wahrmund, op. cit. S. 81.

十一　彼の歴史觀、その二、始源と原因。

彼の目的は、屢々繰り返すように、ローマの世界統治の由來を探り、殊にそれの示す所の教訓を求めんとするに在る。それ故に、彼が事件の原因と由來とを闡明するに努めた事は、前節に說いた所である。彼は

「原因なくしては何事も起り得ない」(註一)

とも言ひ、又、

「歴史の最も本質的なる部分として、吾々は事件に後續するものと、之に同伴する事件と、及び殊にその原因と」を說明する」(註二)

とも稱して居る。如何に彼が原因を重要視して居るかが解る。「何時、如何にして、如何なる原因から起つて居るか」といふ事は、彼が屢々好んで設問する所であつた。(註三)

而して彼の合理的解釋に據れば、「先行するものは後續するものによつて明かにされる」のであるから(註四)、彼は事件の結果から原因を求め、その由來を辿つて探求して行く。即ち倒行的に原因を求めて行くのである。かくの如く因果の系列を遡つてゆくと、或る事件の始源と及び事件の原因とが、如何にして區別されるかといふ問題が起つて來る。又此の點を問題にする程、彼は原因といふ事を深く考へて居たのであつた。

「凡べての企ての始めとは、既に決定した事の實行に到る第一歩であると私は思ふ。是に對して原因といふは決斷及び計畫を起す所のものである。自分の見る所

では、原因といふは、思考、熟慮、及びその際企てらる打算であり、又決斷、決心、に到らしむる所のものである」（註五）

と言つて居る。是に因れば、始源と原因とは明かに區別されて居るのであつて、原因とは、少くとも個人の行動の原因とは、決斷決心に到らしむるものであつて、人の心理的動機に他ならない。

尤も彼の言ふ所の原因は、常に心理的動機をのみ指したのではない。例へば、アカイヤ人がペロポンネソスを支配するに至つた原因を以て、彼は領土の擴張都市の增大、或は富、又は人民の勇氣に歸すべきでもなく、さればとて偶然の事情に歸すべきでもないといひ、それは「自由と平等、一言にしていへば、眞の民主政治は、他の何處に於てもアカイヤ人の所に於て成立せる政體よりもより純に實現されなかつたからだ」と說いて居る（註六）此の場合における原因は、固より心的動機の中にではなく、政治組織の中に、換言すれば環境の中に求められて居る。されば彼が心理的動機を原因としたのは、主として人間の行動についての議論であつて、必ずしも原因を一般に心的動機としたといふわけではない。然し彼が原因を考察するに、富とか領土とかいふ外的な勢力を原因としないで、その勢力の根抵となる政治組織に求めたといふ事は、彼が皮相の觀察より一歩を進めて更に深く且つ廣い根本處に到らんとする意味に他ならない。政治組織といふ環境に原因を歸着せしめ、一民族が此の環境から持續的に精神的陶冶を受け、特殊な傾向が作られるものと解釋して居るのである。

彼が如何に政治組織を、歷史の原因として重大視したかといふ事は、

「國家の營む實際的企圖の凡べてに於ては、その憲法の形式を以て、成功と失敗との最も有力なる原因と見做

さなければならぬ」(註七)

といふ言葉に依つても知らるゝ所である。然し、特に第六卷に於てローマの政體論を試みて居る事によつて一層明かに覗ひ得る。

此の第六卷は、通常の史實の記述とは異なり、ポリビオスの歴史中、最も特色ある一篇である。而して之がために、ニッセンが七分說の一つの論據とした事は既に先きに述べた所である(第四節參照)。此の篇は、最初五卷の小段落をなすものであり、彼自身の言へる如く、特にローマの世界統治の原因を、その卓越せる政治組織の中に求め、讀者をして、十分之を理解せしむる事を目的とする。それは彼の歴史編纂の計畫から必然說かれねばならぬ點であつて、初めの五卷に次いで、此の處でローマの政治組織を評論するのが、最も適當だと考へたのであつた。(註八)

ポリビオスは、一般政體論より進んで、政體の輪廻を說き、ローマ政體の優秀なる點に論及して居る。國家には國王、貴族、人民の三要素があり(註九)之に從つて王政、貴族政治、民主政治の基本的三形式が生ずる。之が惡化するとそれ〳〵僭主政治、寡頭政治、衆愚の政治となる。政體はかくて統計六種となる(註一〇)、而して此の基本的な三形式の、純粹單一の形式を以てしては、必然弊害が伴ふといふので、相互に補助し制肘し得る混合制が最良の政體であると彼は斷定する(註一一)。而して此の點に想到したスパルタのリコルゴスの制度は、實に超人的事業だと稱讃して居る(註一二)。

而してローマの憲法は、リコルゴスの憲法と同樣に混合制であり、「現行の憲法中最善のもの」であり、而もそれは、スパルタの憲法の如くに、單なる抽象的推論の結果ではなく、幾多の葛藤と經驗とに基いて成立したものである所に多大の敎訓

があると稱して居る(註一三)。然しリコルゴスの法は、國家の安全と國民の自由とを確保するといふ點から見れば、完全と思はるゝけれども、今一歩を進めて、國力の發展といふ點から言へば缺陷がある(註一四)。此の意味に於て、スパルタのはローマ憲法に比して一籌を輸するものと思考した。

又四三ー五八節には、諸國の制度とローマのそれとの得失を比較論考して居る。その際アテネとテーベとの隆替は、特殊なる人傑の力によるのであつて、憲法や制度のためではないといふ理由から、之を論ずる事をさけて居る(註一五)。又先きにも一言した如く、プラトンの理想論は、抽象的な理論であつて、現實の制度ではないといふ故を以て、省略に從つて居る(註一六)。之はポリビオスが飽くまでも、史實に據らんとする傾向、又特殊的例外的なものを捨てゝ、一般的普遍的な事實から教訓を見出さうと企てた事が、よく理解されるのである。

尙ほポリビオスは、一九ー四二節に於て、ローマの兵制と賞罰の方法を說き、ローマ軍の勇敢なる淵源を斯に求め、最後に五一ー五八節には、政治組織も兵制も共に、ローマがカルタゴのそれよりも卓越して居る事を比較論評し、以てハンニバル戰役を敍述するの序說として居る。

ポリビオスは、その歷史の實用的目的に應じて機會ある每に、諸國の政治組織の實際に就いて得失を論じ、國民への警告となし、或はローマの發展の由來に鑑みてギリシヤ諸國民を鼓舞して居る吾々は此の篇に於て、彼の愛國的熱情のほゞばしるのを感ずる。

要するに此の一卷には、彼の歷史觀が極めて明瞭に示されて居る。此の點から言へば、第六卷は實に全篇の眼目であると言つても好い。後にマキヤヴェルリが、フロレンス史の殆んど各章の初め

毎に史論を試み、之を歴史事實によつて裏付け樣とした態度と、對照し、考察する時、吾々は極めて興趣の深きを覺ゆるのである。

さて吾々は、ポリビオスの歴史の第六卷に就いての解說が、多少長きに亘り過ぎた事を感ずるが、兎に角彼が、或は心的動機の中に、或は特に政治組織といふような環境の中に、歴史の原因を求めた事は注目すべきである。而して原因を始源から區別したといふ事は、彼が事件の由來を探るに當つても、唯機械的に因果の系列を辿り、表面的に遡り得たといふ範圍だけで滿足しなかつたがためである。卽ち一層深い根底の上に事件の動機を立たしめんとする意圖に他ならない。更に言へば、歴史事件の必然性を、深刻に探求し、飽くまでも、事件の眞實の姿をつきとめんとしたがために、當然起るべき思索の道程であつた。

此の點にも吾々は、ポリビオスの研究態度が愼重である事を認めるのである。然し彼があらゆる事件について、その原因を求めて已まず、之に向つて彌々遡れば遡るに從ひ、又彼が深く入れば入る程、今のべた程度に安住する事は許されない。彼の態度は更に此の上二段に進んで行かねばならない。一つは、原因の考究を自然的に探つて是以上、如何なる點まで推し進め得るかといふ事、卽ち原因の歸着點の問題であり、二つには是と關聯して、心的動機、環境等の諸原因の他に、更にその原因の根底に猶ほ何等かの力、超自然的な作用卽ち運命とも名づくべき程の力を、認むべきか否かの問題がそれである。

註一、Pol. 2, 38.
註二、ibid. 3, 32.
註三、ibid. 4, 38. etc.
註四、ibid. 3, 6.
註五、ibid. 3, 6.
註六、ibid. 2, 38.
註七、ibid. 6. 1.
註八、ibid. 6. 1.
註九、Pol. 6, 11.
註一〇、ibid. 6, 4.

註一一、ibid. 6, 10.　註一二、ibid. 6, 48.
註一三、ibid. 6, 11.　註一四、ibid. 6, 48—50.
註一五、ibid. 6, 43.　註一六、ibid. 6, 47.

十二、彼の歴史觀、その三、

原因と環境

歴史の動作者は人間であるから、歴史の原因を求めて心理的動機に在りとするのは、極めて合理的な解決法であつた。けれども歴史事件を更に考察してみれば、その原因を心理的な動機に歸着する事によつて、十分滿足されたとは言ひ得ない。されば、先きにも一言した如く、彼は政治組織といふような環境をも注目した。

實際、心理的動機も、之を一層深く考へて行くと、人間性そのものが元來一律には論じ難い。人間の性格は多種多樣であり、同一の人に於ても、その心性の發動は、時と場合とによつて千差萬別である。

「人間の素質は、單に肉體的關係に於てのみならず、精神的關係に於ても亦、多種多樣である。それ故に同一の人でも種々雜多なる問題について、或物にはよく通じ、或物には無能であつたりする。のみならず、類似の問題に於ても、同一人が時に最もよく洞察する事もあり、時には全然無理解である事もある。又或時は最も大膽であり、或時は最も臆病であつたりする」(註一)。

右の一節によつても知らるゝ如く、人の性格の複雜なる事、及び同一人の行動と雖も、時と場合とによつては、發動の具合が異なる事を認めて居た事が解る。

此の人間の複雜なる心的傾向は、然し、環境の支配をうけて、多少持續的な規定を蒙ると彼が考へた事は、既に先きに一言した所である。けれども此の他に、人間が決斷をするまでには、別に又刹那的に、種々なる外的制約をうけるのである。彼は曰ふ。

「人々は、時に友人の勸告により、時には事情の變化によつて、幾重にも束縛され、自己の心持に反したる言動をなす事がある」(註二)

と。此の點も亦大にツキヂデスに似て細心である。(註三)

かくの如く、心理的動機そのものさへも、環境から、持續的な、又突發的な、二重の支配を受けるとすれば、そして先きにも言へる如く事件が全く偶發的でないとするならば、一つの事件の原因を求める爲めに、更に心的動機より遡つて、原因の原因を省みなければならない。或は彼は、必然的に事件を指導する力があると考へたかどうか。それが問題である。卽ち彼は、超自然力を排斥し乍ら、而も窮極に於て、神の力若しくは運命の力とも名くべきものを認めたかどうか。若し認めたとするならば、それと歷史事件の合理的解釋との關係はどう解決したか。是が次の問題である。

註一、Pal. 4 8.　註二、Pol. 9, 23.　註三、Thucydides, 7, 8. ニキヤスがシチリヤから本國に救を求むるの使者に壹面を與へて、口頭でするを避けた。それは記憶に錯誤の惧あるのみならず、口上の際の事情によつては、使者が心にもなき虛言を吐かぬとも限らぬと考へたからだといふのである。彼に於ては人性の解剖は處所に、細微を穿つて居る。

十三、彼の歷史觀、その四、必然と運命

先きに述べたる如く、彼は、歷史事件を偶然と解釋せず、而も又、神といふような超自然的勢力によつて解釋する事は極力排斥した。然らば、彼は純然たる自然主義的な解釋を執つたか、運命の力は全然認めなかつたか、といふと必ずしもそうではないのである。

原因についても、種々な條件を探り出さうとする程であるから、彼が時の流れの持つ所の偉大なる力を認め、之を無視する事が出來なかつたのは蓋し當然といふべきであろう。人生における刹那

々々の事件が、端睨すべからざると共に、（註一）比較的長時間の中に起る所の、榮枯盛衰の迹にも驚かざるを得ない。彼は一國の興亡についても、それが動かし難い或る力によつて左右せらるゝと考へて居た。卽ちそれは、運命の力の故と考へたのである。先きに引用した第一卷第四節に見ゆる思想の如きは、それである。「運命は、凡べての出來事を、一點に向ふように方向を定め、凡べては必然に一つの目的に向つて動かされる」といふて居る。ローマの世界統治も亦、運命の力であり、そのローマも亦、何時かは衰へる時があるとさへ解釋して居る。そして此の「運命の最も派手やかでもあり、同時に最も敎訓的でもある、働き方に就いて、その一つの特徵的な見本を見逃さないようにする事は、明かに歷史家としての彼の義務だと考へる」とも說いて居る。（註二）

かゝる思想は、マケドニヤの沒落についても示され、フアレロンの人、デメトリオスの言葉を引用して居る。デメトリオスの言葉は、アレキサンダーが、ペルシヤを亡ぼした事に關したものである。卽ち、

「無限の時、多くの時代こいはず、唯だ吾々の時代に先だつ過去五十年だけでも心に描く人には、運命が如何に殘酷にその力を示したかゞ認められよう」（註三）

と見えて居る。盛者必衰の理法は、僅か五十年百年の間にさへ顯はれるのである。ポリビオスによれば、デメトリオスの此の言葉は、神の口から洩るゝ豫言の如くであると言ひ、自分がマケドニヤの沒落を書くについて、全く無關心に聞き流す事は出來ぬ言葉だと嘆じて居る。

かのカルタゴが沒落する光景をみて、感慨にうたれた所のスキピオの「意味深長なる言葉」を以て得意の絕頂に於いて、自分の運命の轉向を思ふといふ事は、誰でもが、容易に言ひ得る事ではない

(註四)とする所の彼ポリビオスは、自分自らが運命の強い力を認めたものと言へないであろうか(註五)。

自分はポリビオスが超自然力を排除した事に於て、又凡べての事件を因果の形式を以て追求しようとした試みに向つて、彼の科學的態度を承認し得る。又彼が單なる因果の形式よりも一歩を進めて、深刻に心理を解剖し、心理的動機を提唱するに於て、ポリビオスの纖細なる心理解釋が決してツキヂデスに劣らざる事を賞讃したいと思ふ。かくの如く自然科學的な態度をとると共に　なほ進んで彼は人文の展開について一個の歴史觀を建てたのである。時の力の偉大なる事を、正しく把握し理解したのは、彼の世界史的態度と共に大なる尊敬に價すると思ふ。彼は決してツキヂデスに比肩しえない歴史家ではないと言はなければならない。

註一、Pol. 9, 15.
註二、ibid. 29, 6c.
註三、ibid. 1, 4.
註四、Pol. 39, 4.
註五、Bury, op. cit. pp 208ff. には、ポリビオスがクラツクス兄弟の改革より、ローマの衰滅を豫想したものと解釋して居る。然し此の思想は次に述ぶる輪廻の思想から來るものであり、而して輪廻の思想は目前に見えしローマ政治の變化から來たものと解釋しないで、寧ろそれは時の威力に對する考察の、合理的歸決として起つたと解釋する方が穩當ではあるまいか。縱ひ目前の事實から彼の信念が強められた事を許容するとしても。

十四、彼の歴史觀、その五、
輪廻の思想

ポリビオスは、人類の世界における盛衰興亡の跡を、忠實に辿つて、時といふ自然の偉大なる力を知るに到つたのである。此の偉大なる時の力を若し運命と呼ぶ事が許さるゝならば、彼は運命の力を認めたといつて好い。實際彼は之を運命と呼んだのである。(註一)

飽くまでも、合理的立場に終始したツキヂデスは、運命の力神の力は認めたけれども、最後には歴史事件の進行にとつては、それは無視し得べきものと解釋した。（註二）然し吾がポリビオスはそれをどう考へたか。

ツキヂデスは、歴史事實を以て、繰り返へすとは考へないで、唯類似した現象が起ると思惟した（註三）。ポリビオスは、歴史事件の間に輪廻を認めて居る。前者は變化そのまゝを如實に直視した。後者は、一箇の歴史哲學によつて變化を大觀し總括した。

ポリビオスは、先きに述べたる如く第六卷に於て、ローマの政體の變遷を說いて居るが、就中、その九節に於て、各種の政體が逐次に推移して復歸すると言つて居る。君主政治が獨裁政治となれば貴族政治の勃興となり、それが寡頭政治に陷るや民主政治が興起する。然し乍ら人間の性情の常として、人はいつまでも自由と平等との境地を以ては滿足しない。彼等はやがてお互に優越を欲する。例へば、富を以て榮譽を得る者もあろう。けれども最後の優劣は、動物的な腕力の競爭となり、斯に君主獨裁政治が復歸するといふのである。

「是は憲法の輪廻であり、自然の秩序である。政體は自然の秩序に從つて變化し、それ〴〵を經過してまた始めに回歸する」（註四）

といふて居る。

此の政體の回歸、卽ち輪廻といふ事は、彼に於ては單なる抽象的な議論ではなくして、歴史に見ゆる實際だと信じて居た。

「凡べての身體と同樣に、あらゆる國家、及び政治組織に於ても、自ら發達の時代があり、次いで全盛時代があり、やがて衰亡の時がある」（註五）

と言ひ、又、

「特にローマの國に就いても、此の考察は最もよく認め

られる。その成立、その發達、その全盛、反對に又現在の立場から將來沒落するといふ事も最もよく認められる。」（註六）

と斷じて居る。

而して此等政府の起源としては、洪水、疫癘、凶作等の原因で、人類が絶滅に近づく時、本能的に團結して、種の保存を營む所に在りと考へて居る。（註七）此の點に於て、彼が飽くまでも、自然主義的解釋を欲して居た事は明かである。輪廻は卽ち自然の秩序なのである。爭ひ難き、抗み難き時の力、運命の力によつて示さるゝ、人生の浮沈は、實は自然の秩序に他ならないのである。（註八）

之を要するに、彼は歷史事實を確實に、因果の關係に於て把握した。その探究に當つては、深く心理的動機、環境をも考察した。而してかゝる自然主義的解釋を以ても全部を盡しえざる所に時と

いふ偉大なる力を認めた。然しそれさへも合理的な自然の秩序と解釋したのである。歷史の動く姿を、輪廻といふ歷史哲學的思想を以て解決し、歷史は永劫に輪廻の轍の上を動くと、信じたのである。此の點から見れば、ポリビオスは、寧ろツキヂデスよりも、思索に於て、一歩を進めたものと言つて好かろうではないか。

註一、Susemihl, op. cit. S. 98.　註二、Thucydides, 2, 64; 5, 105. 參照
註三、ibid. 1, 22.
註四、Pol. 6, 9.　註五、ibid. 6, 51.
註六、ibid. 6, 9.　註七、Pol. 6, 5.
註八、ツキヂデスも、盛衰ある事が理法だと考へては居る。（2, 64.）然しまだ輪廻の思想は現はれて居ない。

（終り）